

令和 4 年 9 月 2 日現在

機関番号：22604  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2016～2021  
課題番号：16K11919  
研究課題名(和文) 異文化看護能力の開発に向けた基礎的研究  
  
研究課題名(英文) Development of Cross-cultural nursing care  
  
研究代表者  
石川 陽子 (ISHIKAWA, YOKO)  
  
東京都立大学・人間健康科学研究科・准教授  
  
研究者番号：40453039  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：国際化の進展と共に外国人等異文化を背景に持つ人々が看護の対象となる機会は増加している。本研究は異文化看護実践の課題を明らかにし、異文化看護教育に必要な要素を抽出することを目的として都内の外国人患者受入れ医療機関認証制度認証病院9施設において質的・量的調査を行った。看護師は、イスラム教の理解、退院支援の際に患者の生活がイメージできないこと、中国系の人々の産後ケア、女性患者の女性医師嗜好等に困難を感じていた。学習者が身近な問題として関心を持つためには事例を用いたケーススタディは有効と考えられるが、看護基礎教育においては、政治・経済・文化を含めた学際的なアプローチが必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
国際化の進む日本において、外国人等、異文化を背景に持つ人々への医療提供には異文化理解が不可欠である。本研究は、異文化看護実践の課題を明らかにし、今後の看護教育を検討するための基礎資料となるものである。

研究成果の概要(英文)：Needs of cross-cultural nursing has been increasing due to internationalization in Japan. Objective of the study is to clarify issues on cross-cultural nursing and extract components of cross-cultural nursing education. The study was conducted at nine JMIP (Japan Medical Service Accreditation for International Patients) approved hospitals in Tokyo. The nurses felt difficulty to understand international patient's way of life, especially Islamic ones and postpartum Chinese mothers. The results suggest that interdisciplinary approach which includes socio-economic and cultural issues is crucial in nursing education, and case study is effective method for both nurses and nursing students.

研究分野：国際保健学

キーワード：異文化看護

## 1. 研究開始当初の背景

### 1) 在留外国人の動向

日本における在留外国人数は約 212 万人と人口の 1.6%を占め(2014 年末)前年より 5 万人増加している。戦前から在留している在日韓国人・朝鮮人等の特別永住者が減少する一方で、外国人技能実習制度による在留者は 2010 年から 6 万 7 千人増加し 16 万 7 千人超となった(2015 年)。政府は実習期間を 3 年から 5 年に延長する改正法案を提出しており、今後外国人労働者は益々増加することが予測される。また、日本国籍を持つ「中国帰国者(いわゆる中国残留孤児)」とその家族は 2 万人を超えて在留しているが、高齢化に伴い医療・介護に係る文化的課題も発生している<sup>1)</sup>。

### 2) 異文化を背景に持つ対象への看護

米国では、1950 年代に Leininger により人類学を基盤とした異文化看護の概念が導入されたが<sup>2)</sup>、マイノリティに対する看護が重要視され始めたのは 21 世紀以降といえる。AACN (American Association of Colleges of Nursing)は、21 世紀の看護教育において、宗教や言語を含めた文化社会経済的な要因が健康増進や保健医療行動に影響を及ぼすという認識を高めることが必要であると提言し、学士課程における異文化看護教育のガイドラインを示している。日本では主に外国人患者への対応として言語の障壁を中心とした研究がなされてきた。その成果として厚生労働省により医療通訳者の育成事業が実施され、近年ではモバイル端末を用いた多言語医療システムの開発が進められている。看護基礎教育においては 2008 年のカリキュラム改正以降、国際看護学を科目に置く養成施設は増加しているが、内容は国際協力や海外研修等様々であり、国際看護や異文化看護についての共通した概念は無いというのが現状である<sup>3)</sup>。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における異文化を背景に持つ人々への看護の課題を明らかにし、異文化看護教育プログラムに必要な要素を抽出することである。

## 3. 研究の方法

### 1) 国内外の文献レビュー

### 2) 東京都内の JMIP(外国人患者受入れ医療機関認証制度)認証病院への調査

#### (1) 外国人コーディネーターへのインタビュー調査

承諾の得られた 2 施設のコーディネーター 2 名を対象として 2020 年 2 月にインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。内容はコーディネーターへの相談の事例、文化・生活習慣に係る相談事例とその対応、異文化看護に関する研修、異文化を背景に持つ患者ケアに必要な能力等である。

#### (2) 看護師を対象とした調査票による看護実践の調査

承諾の得られた 9 施設に 2020 年 3 月～4 月に調査票を送付し看護師 770 名を対象として看護実践に関する調査を実施した。

## 4. 研究成果

### 1) 異文化看護実践を測定する尺度に関する文献検討

海外では異文化看護実践を測定する尺度が多数存在する。Campinha-Bacote は看護師の異文化看護能力は、異文化の認識、異文化の知識、異文化ケアのスキル、異文化体験、異文化理解へのモチベーションから成るとして 25 項目で構成される「異文化ケア能力尺度」( IAPCC-R: Inventory for Assessing the Process of Cultural Competence Revised Version ) を開発しており<sup>4)</sup>、これは国際比較にも使用されている。文献レビューにより IAPCC-R 日本語版<sup>5)</sup>が存在することがわかったため、開発者と日本語版のワーディングに関し議論を行った。IAPCC-R は米国で開発された尺度であることから、成長過程において異文化を背景にもつ移民等との接触の少ない日本人看護師にとっては理解し難い表現が含まれていると考えた。日本で開発された異文化看護能力を測定する既存の 12 の尺度について検討を行ったところ、Campinha-Bacote の異文化看護能力の概念を基盤に開発された「異文化間看護能力尺度」が最も精緻性が高く信頼性・妥当性が検証されていることが明らかとなった<sup>6)</sup>。

## 2) 東京都内の JMIP 認証病院を対象とした調査

### (1) 外国人コーディネーターへのインタビュー調査

対象者は 2 名共看護師であった。インタビュー調査の承諾が得られなかった施設ではコーディネーターが医事課職員であるため看護実践に関して回答できないという理由であった。相談件数は 30~40 件/月であり、外国人患者の国籍は中国、米国が大半を占めていたがその他の国籍には地域特性がみられた。相談は言語に関するものが最も多く、職員はポケット翻訳機や院内の人材、Web サイトを活用して対応していた。院内に外国人職員・異文化を背景に持つ職員がいることは外国人患者への対応のハードルを下げることに関わり、地域の外国人コミュニティとの交流のある施設もあった。外国人患者の対応に関する研修については 1 施設は全く行っておらず、もう一方の施設は 3 回/年全職員を対象とした研修が行われていた。対応マニュアルの範囲についても差がみられた。異文化看護について 1 名は看護は普遍的なものであることから異文化看護の教育は特段必要ではなく、対象者の理解という看護基礎教育で対応できると考えていた。異文化看護教育には事例の検討が有効との意見があった。

### (2) 看護実践に関する調査

9 施設 251 名から調査票を回収した(回収率 32.6%)。対象者の属性は女性 245 名(97.6%)、男性 6 名(2.4%)で平均年齢は 38.9 歳(SD 8.6)であった。異文化看護の学習経験のある者は 20.7%であり、うち 51.9%は看護基礎教育で、50.0%は院内または院外の継続教育で学習していた(複数回答)。異文化を背景に持つ患者の担当件数は 20 人以上が 35.1%、1~5 人が 22.3%、5~10 人が 21.5%、10~19 人が 16.3%で個人差がみられた。異文化を背景に持つ患者の看護に「困難を感じた」と回答した者は 86.5%であった。具体的には、日本語または英語でのコミュニケーションがとれないこと、食事への配慮、イスラム教の理解、退院支援に際し自宅の環境がイメージできないこと、母国の育児方法がわからず支援ができないこと、患者が入院規則を遵守しない、攻撃的な態度をとるといった課題が挙げられた。「人種差別を受けた」と患者から指摘されたり、患者が女性職員を蔑視する態度をとるといった経験を持つ者もいた。外国語でのコミュニケーションには翻訳機が使用されていたが、正しく翻訳されない、緊急時には患者の状態により使用できないという課題がみられた。

看護師は、外国人患者に対して特別に持込み食を認めたり家族の付き添いを許可する等、入院規則を柔軟に運用し対応していたが、自己主張の強い外国人患者に対して苦手意識を持つ者もいた。女性患者の女性医師嗜好や女性職員への蔑視といった文化的背景を含めたジェンダー意識の違いについて困難さを感じていた。

ポケット翻訳機が普及したことで、外国人患者の対応について言語以外の課題が表面化していると考えられるが、特にイスラム教の理解、中国系の人々の産後ケアについては困難事例として複数挙げられており普遍的な課題といえる。人種や国籍に関する差別意識については、患者の権利擁護といった倫理的課題だけでなく、その背景にある国際社会における人種・宗教・政治等を知ることが対象者の理解に不可欠である。学習者が身近な問題として関心を持つためには事例を用いたケーススタディは有効と考えられるが、看護基礎教育においては、政治・経済・文化を含めた学際的なアプローチが望まれる。看護実践に有用な異文化理解のためのデータベースとして日本看護科学学会が提供する「異文化看護データベース」<sup>7)</sup>があるが、本研究の対象施設では殆ど活用されていなかったことから、異文化看護のリソースの充実と周知の必要性も今後の課題といえる。

#### <引用文献>

- 1) 永田恭子、石川陽子、中国帰国高齢者が医療・介護サービスを受ける上で抱えている困難と不安の実態、日本保健科学学会誌、18巻、2015、22
- 2) Leininger M、Culture care diversity and universality、Jones & Bartlett Publication、3rd Edition、2014
- 3) 中越利佳、森久美子、田中祐子、野村亜由美、城宝環、わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題、愛媛県立医療技術大学紀要、11巻、2017、9-13
- 4) Campinha-Bacote J、The journey continues: the process of cultural competence in the delivery of healthcare services. Transcultural care Associates、5th edition、2007
- 5) Kawashima A、Study on Cultural Competency of Japanese Nurses、Dissertation、George Mason University、2008
- 6) 杉浦絹子、異文化間看護能力の現状と規定要因、日本看護科学学会誌、23巻、2003、22-36
- 7) 日本看護科学学会 HP:異文化看護データベース、  
[https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content\\_id=92](https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content_id=92)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ishikawa Yoko, Setyowati .	4. 巻 10
2. 論文標題 SOCIAL AND CULTURAL ISSUES OF INDONESIAN MIGRANT NURSES IN JAPAN	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Volume-10 : Issue 1, July, 2018	6. 最初と最後の頁 49 ~ 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31674/mjn.2018.v10i01.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 宮崎 里司, 西郡 仁朗, 神村 初美, 野村 愛, 石川陽子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 外国人看護介護人材とサスティナビリティ：持続可能な移民社会と言語政策	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野村 亜由美 (NOMURA Ayumi) (50346938)	東京都立大学・人間健康科学研究科・准教授  (22604)	
研究分担者	成瀬 和子 (NARUSE Kazuko) (70307122)	東京医科大学・医学部・教授  (32645)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------